

ゼミのありかた

柴内 康文

(大学文学部助教授)



大学の「若手研究者」としては、自分の研究について熱く、いささか気負い気味に語るのがこのような場での流儀なのかもしれない。しかし思うところもあり、あえてそのような規範(?)に抗して、ここでは教育について語ってみたい。前提として研究について最小限のことを書くとして、私は社会心理学を専攻し、特に社会調査・世論調査のトレーニングを受け、マスメディアや、インターネットのようなコミュニケーションメディアが人々の行動や社会に与える影響について実証的に研究している。よって、通常の講義ではそのようなことを教えていて、大人数を対象として行われるそれは一方通行の場であり、また自分の最も得意とする場でもあるので、それなりのことができていと思う。

一方、わが専攻(新聞学、四月よりメディア学)では、一年次生からゼミ・実習科目を四年間にわたって取ることになっている。このゼミというものは難しい。自分が大学に入学したときも、大学にはゼミなる、少人数で先生を囲んで行う特有の授業形態があるらしいと聞いていた

が、それはいったい何なのか、先生と世間話でもするのか、それとも皆の前で叱られでもするのか、得体の知れないものだと思い、またある種の恐れのようなものを感じていた。定番の優等生的スタイルでは通用しないのだろうかと思期していたからかもしれないが。入学後はいろいろなゼミに出たが、やはりやり方はさまざまで、今に至るまでその定義や、あるべき姿はよくわからない。それにしても学年が進んだ後のゼミはまだよい。三年次では専門領域の入門を懇切丁寧に指導すればよいし、四年次では卒論のアドバイスをしてやればよい。問題は大学初年度のゼミである。高校生の面影も残る初々しい新入生は、期待に胸ふくらませながらゼミ初体験に臨む。受け入れるこちらには、専門性をそれほど打ち出していくわけにもいかない初学者を相手に途方に暮れる。はて…。

「自分の頭で考える」って

つらつらと考えるに、大学において、そして社会に出てから求められるのは自分の頭で考える能力なのだろう。入学前に勉強してきたことは教科書に書いてあ

ること、それらは基本的に「正しい」ものだ(何せ、国のお墨付きまでついている)。しかし大学は(現実社会も)、知識を創り出していく場だ。そこでは正しいのか正しくないのか未だ判然としない情報がほとんどだし、そもそも「正しさ」そのものもかなり危ういものとなる。学生には、本に書いてあること、教師の言うこと、とりわけ自分の言うことを、丸飲みしない知的強靱さを養ってほしい。

しかし、この「自分で考える」こと、それこそスローガンのに大事だとされているけれど、一体どうやったら身に付くのだろうか。何かネタを投げかけ、これについてどう思うと問いかけても、学生たち皆が沈黙してしまい、なんとも言えない空気が流れ、それに耐えきれなくなった教師がしゃべり出してしまい結局独り舞台となる、というのはよくあることだ。少し前までこちらの側に沈黙して座っていたからまだ覚えていたのだが、学生たちは、もちろん人前で、間違っているかもしれないことをしゃべるのが恥ずかしいということもある。しかし多くの場合、どう考えたらいいのか、どのよう

に疑ったらいいいかが、そもそもよくわからないのだ。それもそのはず、学生たちは、従順に先生の言うことや教科書に書いてあることを身につけ、それを試験で吐き出すことによってよい成績を取り大学に入学してきている。聞いたことや読んだことをいちいち疑ってかかっていたら、勉強の効率は著しく悪いだろう。疑わないことによつてパフォーマンスを発揮してきた新入生を、四月一日を境に、自ら考え、疑う学生に転化させなければならぬ。これは生易しいことではない。

試行錯誤の中で

今も試行錯誤の過程にあるのだが、自分なりの方法論は、やはり過去に自分が出席したあるゼミのやり方である。そこでは文献を読むほか、毎週データで表わされた様々な現象の解釈が提示され、同じデータを前提に、全く別の解釈の仕方を目指して出してくるという練習をした。データは、しばしば「客観的」であるように言われる。しかし実際には、それはこれらの見方を投影する鏡のようなものだ。データの上では同一の現象が、無限の可能性で読み解きうる。自分が、

これが正しい解釈だろうと思ったことがどれだけ思い込みによるものか、また、他人の解釈の落とし穴はどこにあるのか、それこそ赤ペンで直されるように訓練を受けた。疑い批判するということが、時にその刃を自分自身に向けるということについて、いわばドリルのような方法で習ったのだ。今風に言えば、critical thinking(批判的思考法)というものだろう。実際、その時に習った「作法」は、今も考え方の奥底に染みついている。そんなわけで、初年度生にもそういうドリルのようなやり方を使うことが多い。一年経つと、こちらでも驚くほど鋭くなる学生もいてうれしく思う。ひねくれ者を再生産しているような複雑な心境になることもあるが。

紙幅も尽きた。書き終えてみると、教育について書いても、やはり「若手教員」特有の力みと未熟さがにじみ出ているようだ。歳と共にそれを円熟味に変えていくべきなのか、それともこのような青さを忘れてはいけないのか、今のところは何ともわからない。

(しばない やすふみ)

「まち」を問う

小藤 弘樹

(大学経済学部専任講師)



グローバル化とローカル化

近年、「まちづくり」が全国的なブームになっている。このブームの発端のひとつに、一九八〇年代に始まるグローバル化がある。

「グローバル化」が一般的な用語になって以来、多くの人々が企業の海外進出と海外市場の確保を最重要課題のひとつと信じ、この課題を達成した企業に多大な称賛を贈ってきた。この潮流はエスカレートし、現在では、グローバル・スタンダードという「みえない基準」になる(準拠する)製品・技術の開発競争が激しくなりつつある。

時代の潮流に乗ることは企業にとって重要なことであるが、地域経済に大きなダメージを与えることがある。たとえば、技術の宝庫として賑っていた東大阪は、相次ぐ企業の海外移転によって活気を失いつつある。いわば「頭脳」が流出しつつあるこのような地域で、グローバル・スタンダードになる新製品・技術を生み出すことは至難の業であろう。日本経済にとって不都合なことに、同様の地域が

全国的に見られるのである。

そこで始められたのが、冒頭で述べた「まちづくり」である。政府もまた、この試みを支援・誘導するために、産業クラスター計画や知的クラスター事業などを急速に展開し始めている。そこには、全国的に「頭脳」の結集拠点を作り、各拠点からダイレクトに世界へはばたかせて、日本経済の再生を図るという思惑が見え隠れする。いずれにせよ、グローバル化とローカル化は優劣をつけたり、選択したりするものではなく、グローバル化に対応するためにはローカル化が重要であるということがよう・やく・認められ始めたのである。

伝統技術と先端技術のまち「京都」

わざわざ「よう・やく」と強調したのは、理由がある。ローカル化という経済政策が登場する前から、ローカル化とグローバル化を同時に進めてきた地域があるからである。そのひとつが、時に皮肉を込めて「閉鎖的」といわれる「京都」である。

長い歴史と伝統を持つ京都の新しいまちづくりの土台は、電機・電子産業やナノ技術を駆使する産業などである。誰かが、伝統産業の衰退が進む京都経済を憂慮して、計画的にまちづくりを始めたわけではない。一翼を担う企業の多くは創業者らの経緯と経験に基づいて興されており、創業当時から「京都経済の活性化」を謳っている企業などほとんどない。各企業の業種や活動の場が多様であることも、そのことを十分に示しているであろう。

を紹介したいだけである。

この仕組みに対する疑問は尽きない。なぜ京都で、このような仕組みができたのか。この仕組みを構築する人、企業あるいは自治体などは、どのように機能しているのか。この仕組みは京都経済にどの程度のインパクトを与えているのか。他の地域で、同じような仕組みを人為的に作ることができるのかなどである。驚くことに、すでにローカル化という経済政策の対象地域である「京都」についてさえ、これらの疑問に対する経済学的な説明はほとんどない。

めざすべき「まち」とは

それでも、書店には多くの「まちづくり」の本が並んでいる。その大半は各地域の「まちづくり」を紹介し、地域(グループ)内・間における「ネットワーク」の構築の重要性を主張している。確かに、ネットワークの構築は重要である。しかし、単なる情報交換網としてではなく、先述の「仕組み」として機能させるために、「何と何をどのようにつなぎ、どの

ように刺激しあわせるか」を考える方がもっと重要ではなからうか。

世界中のどの「まち」も究極的には「人」の集まりであるが、決して同じ「まち」はない。玩具のブロックの組み立て方を変えれば家や車らしくなるように、「人」と「人」のつながり方が「まちらしさ」を作るからである。さらに、「まち」ごとに集まる「人」が違うことを考慮すれば、どの「まち」にもあてはまるベストな「まちづくり」というものは、始めから存在しないかもしれない。ただし、「らしさ」を持つ「豊かなまち」を作りたいという想いだけは、どの「まち」にでも共通しているであろう。

いったい、どのような「まち」が「らしさ」を持つ「豊かなまち」なのか。京都の事例研究を起点にして、今後も経済学的な観点から、この問題に取り組んでいきたい。

(こぶじ ひろき)

とはいえ、これらの企業はよく似たエピソードを持っている。個々のエピソードは多少脚色されているかも知れないが、仏具、陶器あるいは西陣織など京都で育った伝統産業の技術を応用し、最先端を駆ける企業に成長したという点で共通しているのである。この紙面で「温故知新」を説く気など毛頭ない。ただ、伝統産業が培ってきた多様な技術やノウハウが異業種の企業を成長させ、成長した企業が集まって再び新規・既存企業を成長させようとしていること、そしてその仕組みが自然に育まれてきたという事実

認知言語学のアプローチ

B 田 智子

(大学言語文化教育研究センター専任講師)



日常言語は生きた文脈の中で柔軟に使われており、その多様性と複雑性は言うまでもない。それは省略や曖昧性に満ち、一見したところ、誤りや不要な繰り返し、逸脱などにまで満ちた混沌としたものであり、論理性や科学性に欠けるように見える。しかし、人間の自然な言語活動の中で産み出される日常言語は、何らかの体系や規律を有しているものである。伝統的な言語学では、文法的な知識の解明に主眼をおき、しかも内観的研究に依存し実際の言語使用や文脈を考慮することなく言語形式の意味を決定しようと試みてきたため、そのような一見不規則に見える言語事象の体系や規則を説明するに至らなかった。一方、認知言語学では、人間の柔軟な情報処理を可能にする言葉とその背後にある言語主体の認識のプロセスを解明することに主眼をおき、言語学と認知科学の関連分野の知見を踏まえながら、情報の伝達と理解にかかわる人間の知のメカニズムの解明をめざしている。認知言語学のアプローチは「言語主体の認知的な側面、外部世界を認識する主体の経験的な基盤、主体の認識を介し

て言葉の形式や構造に反映される機能的な側面を考慮していく言語研究のアプローチ」であり（山梨一九九五）、日常言語の複雑かつ多様な形式と意味がどのような要因によって動機づけられているのか、特に言語主体のどのような認知的制約によって動機づけられているのか、を体系的に探究する。

もし言語が理想化された状況で使われるものであるとすれば、または状況こそ変われど個々の事情に左右されないものであるとすれば、ある事象を言語化する際には一般化された規則が適用されるとすればよい、ということになる。しかし現実には、われわれはその場その時の二度と完全に再現されることのない心的状況や物理的状況を含んだ文脈状況において言葉を使用しており、われわれの言葉には言語主体によるその時々の外部世界の解釈、カテゴリー化、意味づけなどに関わる認知的な要因が反映されているものである。話者の主観的解釈や意図により、ある事象の認知のしかた自体が変わってくる。そしてそれに基づく言語使用も当然多様なものになる。認知言語

学では、語彙、句、構文等のそれぞれのレベルの異なる言語単位が文法規則によって規定されるのではなく、認知主体の概念化（言語使用者がある対象や出来事をどのようにとらえるか）を反映している、と考えるのである。

最近の私の研究の中で、伝達話法における時制交代現象を取り上げた。我々が過去の事象を伝達する際にはまずそれらの事象を回想するため、我々の語りや伝達の様式は当然、回想の際の認知様式に影響を受けていると考えられる。しかし伝達節の時制交代現象に関する先行研究においては、そのような伝達の背景にあるものは考慮されず、一般動詞の歴史的現在形と同一視した上で説明できない部分については変則的な現象として例外（または誤用）視されてきた。新たに、自然言語における伝達や語りの様式が話者の事象認知活動を反映したものであるという観点から認知的アプローチをとることにより、伝達節における時制交代現象のシステムティックな性質が明らかになってきた。回想の際に、話者が近接性、心的関わり、自己アイデンティティー等

の複数の要因によって被伝達事象や被伝達話者に対して異なった視点をとることから、これらが言語化の段階で伝達節時制に反映されて一見不規則にも見える現象が生じたと考えられる。

さらに、日常のカジュアルな伝達場面ですら直接話法においてsawに加えて最近do, know, goが伝達動詞として用いられる傾向が高まっているが、認知言語学的アプローチによりその背景や動機の解明を試みた。自然言語における意味変化は我々の持つ創造的認知能力に基づいており、この認知プロセスにおいては、類似性やアナロジーの認識に基づくメタファーや、近接性ないしは隣接性の認識に基づくメトニミーが重要な役割を担っている。この視点から、新しい伝達表現が拡張してきたプロセス、さらに通時的研究を加えて文法化のプロセスまでを考察した。その結果、伝達動詞交代現象についても新しい見解が得られた。

簡単に紹介してみたが、認知言語学とは一体何を研究対象にしているのか、という疑問がよく出されるのも事実である。実際、認知言語学が対象とする領域

は、音韻論から語用論まで、さらに通時的研究、言語習得に至るまで幅広い。もともと認知言語学では、生成文法とは異なり、言語を司る能力は言語以外の一般認知能力との連続性の中にあるという前提に立っているため、身体性をはじめとする経験的基盤に根差し、カテゴリー化、比喩、拡張、図と地の認知、視点の投影、参照点能力、イメージスキーマ形成等の一般的認知能力から言語現象をとらえようとする。また、人間が環境や社会との相互作用に関わる問題として、文脈や対人関係的な要因を含めて言語運用をとらえる。さらに、記憶、人工知能、自然言語処理、心理学、他の研究とも関連しながら展開している。すなわち、認知言語学は関連分野とも密接に関わりながら言語現象を動的にとらえることにより人間の知のメカニズムを探究していく新しい研究プログラムであると言える。

参考文献

山梨正明一九九五『認知文法論』ひつじ書房
山梨正明二〇〇〇『認知言語学原理』くろしお出版

(さきた ともこ)

ことばをかたるコトバ

大島 中正

(女子大学学芸学部助教授)



私の研究テーマの一つは、「メタ言語としての日本語」である。メタ言語とは言語についてかたるための言語のことで、国語辞典の語義説明は、その典型的な例である。

ここでは、私にとって師であり、友であり、研究の対象でもある辞書についての思いの一端をのべたい。

1. 辞書を読むことをおぼえた高校時代

高校二年生の時、「倫理社会」という科目が、もともと好きだった。「人間って何だろう」などといったことを考えるのが楽しくて仕方がなかった。「人間」「思想」「自然」「科学」「宗教」「愛」などの語義説明を、読んで、わくわくした。国語辞典の読みくらべをしたり、和英辞典から英英辞典へとハシゴをしたりして楽しんだ。現代国語の予習で難解な語句の意味・用法を調べることも、自分でものを考えるための手がかり・足がかりの一つとして辞書を読むことのほうが、おもしろいと思った。そして、このようなことをしながら暮らしたら、自分にとっては幸せだなとも思った。

2. 日本語教師になって知った至福の時

一九八三年の四月、私は日本語教師になった。京都日本語学校がフリダンであった。約一カ月の研修を終えて、初級から上級までのクラスを担当した。学習者の母語も多様であった。

初級のクラスの教案を作成していた時のこと。ある一つの課に「となり」と「よこ」とが同時に新出単語として提示されていた。どんな用例を提示すればよいか、ひどく困った。日本語母語話者の国語辞典が、よい相談相手にならないことを痛感した。もともと、一九七六年に柴田武氏らによる『ことばの意味 辞書に書いてないこと』（平凡社）というすばらしい参考書の刊行が初まっていたので、基本語の意味・用法を分析・記述する方法を学ぶことはできたのだが。毎時間学習者に理解できる日本語を駆使して、適切な用例文をつくったり、語義の説明やその単語の使用上の注意事項の提示をしなければならなかった。最初は苦しみの連続であったが、苦しみが、少しずつ楽しみに変わっていったのをはつきりとおぼえている。

バであろうかと考えた。

現在、国語辞典を主たる対象として、語義説明の方法・用語・構文についての調査を行っている。

たとえば、日本語は擬音語・擬態語の豊富な言語であるといわれている。『例解新国語辞典』（三省堂）の語義説明に使用されている擬態語のなかで、使用頻度の高いものは「はつきり」「すっきり」「きちん」などである。日本語学習者にとっては擬音語・擬態語の習得は、その母語を問わず、難しい。語義説明にあたっては、その使用に注意を要するのである。日本人がやさしく説明したつもりであっても、外国人にとっては難しい。

4. 内なる辞書の充実を夢みて

辞書についての論文をまとめる時には、いつも恩師である玉村文郎先生の、次のことばを思い出すようにしている。

辞書を使いながら、辞書に溺れずに、辞書を超えた深い言語の力を養うこと、個々人がいわば無形のすぐれた

辞書を自己の内部に形成するように努めることが肝要である。（玉村文郎編『講座日本語と日本語教育 7 日本語の語彙・意味（下）』明治書院）

ことばをかたるコトバをあげつらう者は、自分でもことばをコトバでかたれなければならぬ。私も、日本語教育にたずさわったおかげで、辞書が提供する情報やその表現を批判的にみる目を養うことができた。しかし、自己の内なる無形の辞書の内容は、はなはだ貧しい。では、どうすればよいのだろうか。実例の博搜と吟味と分析、そしてメタ言語による表現の練磨。これにつぎるのであるうか。

高校生のとき、「人間って何だろう」と、青くさいことを考えて、辞書を読むことをおぼえた。現在は「人間はコトバでことばをどのようにかたっているのだろう」という問いにこたえようとしている。青くささは日々増すばかりである。

（おおしま ちゅうせい）

3. メタ言語としての日本語への関心

先行研究の問題点を把握し、事例も多く収集し、ネイティブチェックも行った。それでも適切なコトバが見つからない。そんな時は、ひどくもどかしい思いをするものだが、それは、至福の時でもある。

一九九七年の二月に日本語教育誤用例研究会から『類似表現の使い分けと指導法』（アルク）という本を出した。編集委員の一人であった私は、編集会議で毎回、司会をすることになっていた。しかし、いつも議論にアツクなりすぎて、司会者失格であった。監修者の佐治圭三先生の研究室（京都外国語大学）や岡山大学の山内博之氏の研究室で夜がふけるのも忘れて、議論をした。

一九九七年の四月から一年間、私は中国の北京での在外研修の機会に恵まれた。そのころから、ことばをかたるコトバに対する関心が強まってきた。中国の書店で、中国語を中国語で記述した「詞典」や『論語』の現代中国語による注釈書なども入手した。外国人である私にとって理解しやすいコトバとはどんなコト

恣意的に始まった 私の文学研究

松村 延昭

(女子大学現代社会学部教授)



大学生を送った七〇年代初めは学園紛争のまっただ中で、とても落ち着いて勉強に集中できるような環境ではなかった。行動を起こさず傍観していること自体が罪悪であるかのように言われたこともある。そのような状況下で将来に不安を感じ、とにかく英語のスキルだけはいつかりと身につけたいと思った。時代を問わず英文学科に在籍する学生の多くが求める目標である。それゆえ、四年次では文学や言語学ではなく、エッセイや短編小説を英訳するゼミを選択した。しかし、大学院進学を決めた時には困った。翻訳を専門に修士号をめざすことはできず、作家を絞っての文学研究か言語学を選択しなければならなかったからだ。

ほぼ最初から研究始めるのにシェイクスピアやメルヴィルでは手強すぎると感じたので、比較的新しい時代のアメリカ文学なら読みやすいだろうと勝手に決め込み、その中から以前に読んで気に入っていた『偉大なギャツビー』の作家、F・スコット・フィッツジェラルドを研究することにした。彼なら作品数も少なく、各々の小説が比較的短かったので取

り組みやすいだろうと思った。修士論文では、『ジャズエイジ』と称されたアメリカの一九二〇年代の時代背景からフィッツジェラルドの作品を解明していった。フィッツジェラルドは鋭い感性でもって、当時の時代精神を的確にとらえ、美しい文章で表現していた。当時も巷にはアメリカに関する情報があふれていたのだが、研究を進めていくにしたがつて、半世紀ほど前のアメリカについていかに自分が無知であつたか、またそれを知っていくことがいかに楽しいことかと感じた。

フィッツジェラルドの作品は確かに少なかつたが、そこには多種多様な意味が潜んでおり、とりわけ代表作の『偉大なギャツビー』はいくつもの読みを許容する素晴らしい小説であつた。二十世紀末には、雑誌などが二十世紀の小説ベスト一〇〇をリストアップしていたが、『偉大なギャツビー』は最もアメリカらしい小説として、その二位にあげられることが多かつた。主人公ギャツビーの夢はよく『アメリカの夢』と比較されるのだが、『アメリカの夢』とは個人により大きく異なる漠然とした言葉であつて、ほとん

どの辞書（英和を除いて）がその定義を載せていない。しかし、リンカンやカーネギーのようにゼロから人生をスタートし、独立独行で社会の階段を昇り、スタート地点から著しく離れた地点への上昇を成し遂げた者がその代表的体現者だとするなら、犯罪に関わり短期間で大富豪となつたギャツビーを同列に加えてもよいのであろうか。また、彼の蓄財の目的は、今は人妻で娘をもつ過去の恋人を取り戻すことである。しかし、フィッツジェラルドはギャツビーの稚拙な夢を、無限の可能性を秘めた新大陸を目前にした者たちの抱いた夢と重ね合わせていく。フィッツジェラルドは、夢は実現しなければならぬのかと問いかける。つまり、夢を創造する瑞々しい感覚と、その夢を実現しようとする真摯な態度こそが人生には必要なのだ、とこの小説は教えてくれる。他者の目には愚かに写つたとしても、ひたむきに理想を追求しようとするアメリカ人の姿がそこに重なって見えるがゆえに、この小説はアメリカ的なのであり、時代を超えて人を魅了するのだらう。

その他にも、「二重の視点」の問題、登場人物の性的曖昧性、シナリオ作家としてのフィッツジェラルドなど、いくつかのテーマからフィッツジェラルドの作品に対するアプローチを試みてきた。しかし、十年ほど前から、フィッツジェラルドの研究に少し息詰まりを感じてきた。というより、興味の対象が同じ一九二〇年代のアメリカの作家でも、従来の文学史ではあまり省みられることのなかった移民の作家たちへと移っていった。フィッツジェラルドの短編『裕福な青年』で、語り手は有閑階級に生まれ育つた者に対する羨望の眼差しを向けるのだが、当時のアメリカには、その語り手を羨望の目で眺める者たちも多くいたはずである。東欧からのユダヤ系移民の作家であるエイブラハム・カーンの『デヴィッド・レヴィンスキーの出世』やアンジ・アイーリアスカの『パンを与える人たち』には、それらの人たちの世界が描かれている。英語を第一言語としない移民作家の小説は単純で、時には文法的に破格の英語で綴られているのだが、そこからは、ひたすらアメリカ人になろうと悪

戦苦闘する者たちの生の声が聞こえてくる。また、アメリカ人とは何かという大きな問いが投げかけられてくる。

現在は、移民作家研究の流れから、現代アメリカ社会のマージナルな部分に生きる人々を描く作家を研究していこうと思つている。例えば、泥沼化した中東紛争を故国を離れ単純化して認識する主人公を描く、パキスタン系移民作家であるタヒラ・ナクビ、プエブロ文化を守りながら時代の変化を受容する主人公を描くネイティヴァアメリカンの作家レスリー・マーマン・シルコなどである。極めていいかげんな理由で始めたアメリカ文学の研究であるが、研究を進めるほどに感じるのはアメリカ社会の多様性である。後何年の研究生活が許されるのかはわからないが、今少しアメリカ人とアメリカ社会を文字を通して覗いてみたいと思つている。

(まつむら のぶあき)

イギリス・アドバンシング物理
の研究と公開講座・授業の実践

山崎 敏昭

(高等学校理科教諭)



1. はじめに

私が京都・和歌山の大学教員・高校教員二十人程と一緒に「アドバンシング物理研究会」を始めて二年が経つ。○一年に、開発した中心グループの一人、フィリップ・ブリトン氏が来日、京都で公開講座を行ったときに参加したのが発端である。イギリスで行われている新しい実験を中心とした物理コースの取り組みをもっと自分たちで勉強し、生徒たちにも実践していききたいと月例の研究会を始め、そのネットワークは着実に拡がってきている。

2. アドバンシング物理とは

「アドバンシング物理 (Advancing Physics)」は、イギリス物理学会が製作した新しいAレベル物理コース（イギリスでは十六歳までが義務教育、その後がAレベル、AS、A2の二年間）である。これは六〇年代の「ナフィールド物理」以来もっとも大がかりな物理カリキュラムの全面的刷新で、教材の全面的な再構築、内容の現代化、科学に関する多様な能力（装置や材料の特性に応じて選ぶ能力、発表の能力、研究を構想する能力）

の評価、情報技術の全面的な活用などのねらいを生かすことを考えて構成されている。表1のように、ASコースでは、第一章では画像処理などの仕組み、第二章では実際に用いられているセンサーの仕組みなどが扱われており、第五章では原子間力顕微鏡なども登場している。A2では、発電機、モーター、半導体など現代技術を生かした物理も多い。

教材としては、教科書、生徒用のCD-ROMがある。実際の授業は、CD-ROMを用いて行われるがその内容は豊富で、多種多様である。学習の中心はActivitiesで、演示実験、ソフトウェアを用いた学習、生徒による実験がそれぞれの章で組み合わされ、学習が深まるようになっていく。また、実験の中には、実験で原理

表1 ASコースの概要

(前半)	現場の物理	
(ユニット)	コミュニケーション	
1	画像を作る (imaging)	10時間
2	感知・計測する (Sensing)	20時間
3	信号を送る (Signaling)	10時間
(ユニット)	デザイナー・マテリアル	
4	材料を試験する (Testing Materials)	12時間
5	材料の内部を覗き込む (Looking Inside Materials)	8時間
(後半)	諸過程を理解する	
(ユニット)	いろいろな波と量子的な振る舞い	
6	波動的な振る舞い (Wave behavior)	20時間
7	量子的な振る舞い (Quantum behavior)	10時間
(ユニット)	空間と時間	
8	空間と時間の地図を作る (Mapping Space and Time)	10時間
9	次の動きを計算する (Computing the Next Move)	20時間

た。

○二年夏には同志社高校で高校生、大学生三十三人で「センシング」を中心に、センサーを通して電流回路の基礎知識を学ぶことを、○三年夏には平安女学院高校で同じく二十一人で「次の動きを予測する」を題材に、IT機器を活用した力学・運動学の探求を課題に行った。どちらも前半で基礎知識、手法を学んだ後、探求テーマに班ごとで取り組んだ。左上図は、ある班が発表したときの図であるが、「熱いことを知らせるセンサーシステムを作る」プロジェクトに取り組む、サーミスタの特性を調べた後、

どんな抵抗を用いれば六〇度Cで発光ダイオードが光るかを基本的な回路の知識を使いこなして求め、予測通りのセンサーに仕上げていく。また左下図は、画像を取り込み、グラフを描くソフト「ビデオイント」を用いて、「ヒトの運動を解析する」探求に取り組んだ発表の様子である。センサー回路についても、IT機器についても、目標と手法が明確であれば生徒はたやすく使いこなすし、課題に応じて探求を行うことができ、また挙げた成果についての満足度も大きいことがわかった。

この研究会で得た内容を授業の場で生かす、実験内容の変革と共に高校物理全体のカリキュラム改善を視野に入れて活動を展開していきたいと考えている。

* アドバンシング物理研究会HP

<http://adphy.hp.infoseek.co.jp/>

参考文献

(1)笠岡平 「アドバンシング物理の紹介」：物理教育 50-1、32 (2002)。

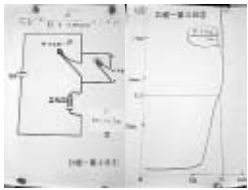
(2)山崎敏昭 他「アドバンシング物理における電流学習の新しい視点」：物理教育、51-3、202 (2003)。

(やまやま としあき)

を確認するようなものばかりでなく、材料だけが与えられ、予想を立てて実験方法も考え、法則性を発見、検証するようなオープンエンドな発展学習、班ごとに違う実験を行い、発表を重視しながら基礎知識を全体のものにしようとするものなどがある。

3. 研究会の取り組みと公開講座

研究会の活動の中心は教師用のCD-ROMの内容検討、そこで教材化されている実験の追試などである。そこにはOverview、Teaching Planや各種教材、ソフトウェアから問題、読み物など膨大な内容がある。活動では、これを試訳しながら教員同士が討論し、また実験器具の作成もしながら追実験し、その意図を探っている。この研究会での取り組みは、日頃の私たちの高校物理実験が、マニュアル通りに一時間で手際よく行わせ、レポートを通して「正解」を確認するような意識を生徒に持たせているのではないかという点で、実験の再検討を迫られていることを感じさせてくれた。実際に私たちが学んだことを実践する意味で、高校生を集め、夏に二回の公開講座も行った。



ある班作成の「熱いことを知らせる」センサー回路 (左図) とサーミスタの温度特性 (右図)



「ビデオを用いて、歩きの運動を探究し、足の動きを分析する」

樋口一葉「大つごもり」
の朗読授業

相模 浩史

(中学校国語科教諭)



二〇〇三年二月に中学校三年生の国語科教材として、樋口一葉の「大つごもり」に取り組んだ。その概要と私の考えを紹介して、多くの方からご教示とご批判を賜りたい。

朗読に取り組む意味

昨今「朗読」の重要性がよく言われている。しかし、これは全く新しい学習方法の提唱ではない。かつては「声に出して読む」ことが学習スタイルとして主流でもあった。

朗読とは単に声に出して読むことではない。自分自身が作品をどのように読んだのか、その「読み」を具体的に表現し、他者へ聴き手に伝えることである。個人の「読み」が自己完結せずに、他者と共有することに朗読の醍醐味があると言える。

仲間の前に立つて自らの「読み」を語り、仲間がそれを「聴く」という学習空間を作り出したいと考え、朗読の授業を展開してみた。

なぜ「大つごもり」なのか

樋口一葉作の「大つごもり」は、一八

九四（明治二七）年一二月に世に出た作品である。一世紀近くも前の作品、しかも擬古文の文体による作品をなぜ朗読教材として取り上げたのか、それは次のような視点からである。

①明快なストーリーと人物造型

「大つごもり」のあらすじ―大金持ちだが奉公人に冷たい山村家に奉公するお峰は、いつか恩愛が恵まれると信じ不平も言わずに働いている。お峰は両親と死別し、伯父一家に養育されたのだが、その伯父が病床に臥し、一家は貧苦にあえいでいる。伯父一家のために彼女は二円の借金を申し出るが、御新造は一度は約束しておきながら、大つごもりの日に冷然とこれを踏みについた。お峰は怒り、途方に暮れ、無我夢中で掛硯の引出しにあった二十円から二円を盗み、受取りに来た幼い従弟三之助に渡した。やがて決算の時が来た。お峰は観念し、罪が伯父一家に及ばないことだけを祈った。しかし、掛硯の中には金は全くなく、山村家の長男石之助の受取書だけが入っていた。先妻の子で、山村家の家風に反抗して勘当同様の石之助は、お峰の罪を自ら背負い、彼女を窮状から解放してやった

のである。（小学館「樋口一葉全集」による）

ほとんどの生徒たちにとって初めて出会う作品であるが、金銭をドラマの中心に据え明快な展開を持った作品なので、何度も読むうちに内容把握が可能である。

②朗読して「分かる」魅力

冒頭部の「師走の空のから風ひゆうひゆう」という言葉。乾燥した風が肌に刺さるように吹きつける中で女中奉公の辛さ。また、借金の申し出を踏みこまれた後の「正午の号砲の音高く」という表現。心の動悸がそのままに響き渡るようである。自分の声を通して耳で感じるときこそ、イメージが具体化されていく箇所だ。このようなところを通して朗読のおもしろさを体感させたい。

③「明治」という時代

現代の中学生にとって、「明治」は「古典」と呼ぶほうが感覚的に合っているのではないかと思う。しかし、作品に描かれた人間の情は決して古びたものではない。今の時代に通じるものである。変わらぬ人間の思いに目を向けることで、さらには古典文学作品の世界への橋

反省と今後の課題

今回の取り組みでは、私自身の勉強不足もあり、十分な「朗読」の域まで達し得なかったのが実情である。しかしながら、同志社中学校の三年生三学期という時期―大多数の生徒が同志社高等学校へ推薦で進学するゆとりのある時期―を生かして取り組むことのできた教材であった。今後、教材としてより深めていきたいと考えている。

私は学生時代の四年間、能を中心に研究した。そのときに感じた「語る」ことの持つ力の不思議さが、今回の取り組みの原点と言えよう。言葉にエネルギーを吹き込む喜びと感動を共有できる空間を作っていきたい。そのために「語る力」と同時に「聴く力」を育てることに目を向けていくことが重要である。教科の枠組みを超えて、学校生活のさまざまな場面で、教師同士が連携を取りながら育てていく課題だと私は考えている。

ことばに生命を感じる生徒に育ってほしい。これこそ「同志社教育」ではないだろうか。

（さがみ ひろし）

授業計画

○全文の教師音読（一時間）

○あらすじまとめと朗読練習（三時間）

全文を八場面に分け、一場面を五人のグループで担当する。担当場面の読み合わせを行い、あらすじをまとめる。グループ内で読みを深めていきながら朗読の分担を決める。

○朗読発表（二・五時間）

心地よい緊張感に包まれた教室に声が響く。朗読を聞きながら「そういうことだったのか」と、ひとりで納得の反応を示している生徒もいた。